

令和 6 年 6 月 23 日現在

機関番号：33910

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19H01247

研究課題名(和文)近代国家の文化的アイデンティティ形成における古代表象の諸相

研究課題名(英文) Ancient Representations in the Formation of the Cultural Identity of Modern Nations

研究代表者

玉田 敦子 (TAMADA, Atsuko)

中部大学・人文学部・教授

研究者番号：00434580

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,490,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、18～19世紀のヨーロッパにおいて、古代ギリシア・ローマの思想や文芸が、近代国家の文化的アイデンティティの基盤として利用された経緯を考察した。そこで主に明らかにされたのは、ヨーロッパの近代国家が形成される過程において古代表象が利用された背景には、歴史記述の再構成による文化的アイデンティティの「アプロプリエーション 盗用的利用」があることである。例えば、近代のフランスにおいては、古代表象が有する特権的な価値、中でも崇高や英雄性といった男性的な価値が文化的アイデンティティの基盤と考えられていたことから、古典古代の思想や文芸は文芸教育において模範すべき規範として扱われた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

文学、思想史、知性史の分野において、近代国家の文化的アイデンティティの問題を扱う研究は乏しく、これまで包括的に取り上げられたことはない。また国家アイデンティティの問題は、ジェンダー的価値と切り離すのが不可能であるにもかかわらず、ジェンダー的視点をもつ研究はまだ見られない。このため本研究では、研究課題の核心をなす学術的「問い」として「近代とは何か？近代国家の形成、特にその文化的アイデンティティの形成において、古典古代の表象は如何なる役割を果たしたのか？」という2点を設定した。

研究成果の概要(英文)：This study examines how ancient Greek and Roman thought and literature were employed as the foundation of cultural identity in modern European nation-states during the 18th and 19th centuries. The primary finding is that the appropriation of ancient imagery, particularly the reconstruction of historical narratives, played a crucial role in utilizing ancient representations during the formation of modern European nation-states. For instance, in early modern France, ancient representations, particularly those embodying masculine virtues such as sublimity and heroism, were deemed fundamental to cultural identity. Consequently, classical Greek and Roman thought and literature were regarded as exemplary norms in literary education.

研究分野：フランス文学

キーワード：近代 新旧論争 古代表象 文化的アイデンティティ 人文学 アプロプリエーション 古典 崇高

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究開始までの申請者らによる研究によれば、①18世紀のフランスにおいては、西欧におけるフランスの覇権を形成する上で、古代ギリシアとローマの思想が積極的に利用されてきた。他方②17世紀以降、サロンや宮廷において発展した女性的な文化は18世紀になると「墮落した習俗」の源泉として低く評価され、モンテスキューやルソーをなどの啓蒙の思想家たちは性別役割分業と家父長制家族の正当性を提示して、女性を二流市民として位置付ける。さらに③科学史においてもフランス王立アカデミーなど、各国におけるアカデミーによる活動と国家アイデンティティの顕揚の問題は切り離すことができない。また、近代科学の成立において女性が排除されてきた点もよく知られている。さらに④近代ドイツでも古代ギリシアに起源をもつ哲学は思想的基軸となったほか、英語圏でもヒュームからウォーレスに至る近代古代論争は近代思想の成立の軸となっている。また革命期のフランスにおいては、コンドルセが古代との対比において「近代的個人の自由」を提唱した。19世紀においても古代表象を積極的に利用する傾向は続き、欧州におけるフランスの覇権を支えるものとなる。

本研究は、この課題について研究分担者と代表者が協力することで領域横断的な総合研究として結実させる。具体的には、まず代表者が従来取り組んできた「18世紀フランスにおける古代表象とナショナリズム」に関する国際的研究を展開する形で、革命期から19世紀に時間軸を拡大し、さらに他のドイツとイギリスにおける古代表象の受容についても比較検討をおこなう。

2. 研究の目的

本研究課題の目的は、「近代とは何か？」という人文学における最大の課題を見据えた上で、近代国家の形成において古典古代の表象が果たした役割を明らかにすることである。具体的には17世紀終盤にギリシア・ラテンの古典と当代のフランス文学の優劣をめぐって発生した近代古代論争が19世紀に「古代表象と近代意識との間の緊張関係」に発展する過程を手がかりに、以下の4つの軸を据えて考察を進めた。

- ①近代古代論争と近代国家の形成
- ②「近代家族」の形成における「古典古代」
- ③《近代》の成立と自然科学：「鏡」としての古代表象
- ④近代社会の自己了解としての歴史ビジョンの諸相

3. 研究の方法

(1) 2019年度は、まず6月に第41回日本18世紀学会大会を中部大学にて開催し、共通論題Ⅰ「思想史とジェンター」と共通論題Ⅱ「《近代》の形成における古代表象の諸相」を組織した。共通論題Ⅰでは水田洋氏（日本学士院会員・名古屋大学名誉教授・中部大学客員教

授)、水田珠枝氏(名古屋経済大学名誉教授)、渡辺浩氏(日本学士院会員・東京大学・法政大学名誉教授)を招き、①「18世紀から19世紀における国家アイデンティティの高揚と父権的家族の生成」のサブテーマについて考察を深めた。また共通論題Ⅱでは「近代社会における時代意識と歴史観による国家アイデンティティの形成」に関して分担者の深貝保則氏と坂本貴志氏が報告をしたほか、川出良枝氏、青山昌史氏を招き、議論をおこなった。この大会には分担者全員が中部大学に参集し、本研究課題の今後の方針を確認した。

さらに7月にはエジンバラ大学で開催された国際18世紀学会において、代表者の玉田がソルボンヌ大学 Céline Spector 教授、リール大学 Gabrielle Radica 教授、ジュネーヴ大学 Martin Rueff 教授と共に①「18～19世紀における国家アイデンティティの高揚と父権的家族の生成」のサブテーマをめぐって *Le statut et l'identité des femmes dans la philosophie des Lumières* という題目のセッションを開催した。

2020年1月には Radica 氏を客員教授として1ヶ月間、横浜国立大学に招聘し、複数の講演をいただいた。特に1月11日には分担者が参集する研究集会を開催し、分担者の深貝保則氏、坂本貴志氏、飯田賢穂氏、井関麻帆氏が報告をしたほか、Radica 氏からコメントと報告を頂戴した。また、1月24日には別途招聘した Rueff 氏と共に早稲田大学にて、*Le 18eme siècle et les Lumières : l'État des études et des questionnements* という題目の研究集会を開催し、新たな国際共同研究の形を模索した。

(2)2020年は年度前半においては、パンデミック下における研究遂行の方策を模索した。その結果、年度後半においては、中部高等学術研究所において分担者の安藤隆穂氏と玉田が2016年から主宰してきた「人文学の再構築」研究会を zoom にて再開するなど、オンラインでの研究集会を開催することが可能になった。

(3)2021年度もパンデミックの影響により、当初予定していた海外での資料調査やシンポジウムの開催などはかなわなかったが、4回の研究会をオンラインにて開催した。まず(i)2021年7月31日は研究分担者の坂本貴志氏が「近代における古代表象と民族意識の形成—ヨハン・ゴットフリート・ヘルダーの進化論的古代神学」というテーマで、(ii)11月21日は研究分担者の畠山達氏が「近代国家の文化的アイデンティティ形成における古代表象の諸相—中等教育にみる「古典」とその反射」という内容で、(iii)2022年3月2日は研究分担者の隠岐さや香氏が「自然科学、数学の表象にみられる古代と近代」というテーマにて報告をおこなった。(iv)さらに3月29日には東京藝術大学の井奥陽子氏を招聘し、単著書籍『バウムガルテンの美学：図像と認識の修辞学』について報告をいただいた。これらの研究会では、各報告者が本研究課題に関してそれぞれ独自に進めた専門研究について発表をおこない、研究分担者がコメントをして共に議論をおこなう形で本課題を多角的な視点から検討した。

また2021年6月28日にオンラインにて開催された日本18世紀学会43回大会においては、研究分担者の隠岐さや香氏が共通論題「学問・芸術の制度と『自由』—18世紀におけるアカデミー、大学、官僚機構」にてコーディネーターを務めた。このシンポジウムにおいて

は、隠岐氏が「パリ王立科学アカデミーと『自由』」、玉田が「近代語による国家の創設—アカデミー・フランセーズと啓蒙期の言語革命」という題目の報告をおこなった。この共通論題に関しては共著書籍の準備が進んでいる。

(4) 研究代表者の玉田は、2022年度の中部大学海外研究員に選出され、2022年4月より1年間、リール大学「知識、テキスト、言語」研究室(UMR 8163)のGabrielle Radica教授による招聘のもとで研究を進めた。フランス滞在中は、海外研究協力者のRadica教授をはじめ、第一線で活躍する近代フランス思想・文学研究者の協力を得てリール大学古典資料センター、フランス国立図書館、ジュネーヴ大学図書館における資料調査をおこなった。またRadica教授と共にリール大学にて「デイドロと美学」をテーマとした研究集会を開催した。また2022~2023年度はパリやジュネーヴにて、代表者が資料調査を再開したほか、海外研究協力者のCéline Spector(ソルボンヌ大学教授)、Martin Rueff(ジュネーヴ大学教授)とも研究打ち合わせを重ねた。

4. 研究成果

本研究の成果は、研究代表者、分担者がそれぞれ個別に発表したほか、2023年の7月にAntiquity and the Shaping of the Future in the Age of Enlightenmentというテーマで開催された国際18世紀学会ローマ大会に結実した。ローマ大会では、オックスフォード大学名誉教授、P.コーフィールド国際18世紀学会会長からの依頼を受け、渡辺浩東京大学名誉教授を筆頭著者とした基調講演(「The Makings of Antiquity: Japanese Experience in the Seventeenth and Eighteenth Centuries」)を研究分担者の隠岐氏と共に作成し、現地では隠岐氏がスピーカーを務めた。また7月4日に開催されたセッション、「ルソーと古代: いかにより近代は構築されたか?」では、セッションにおいては、上記三名の海外研究協力者と研究分担者の井関麻帆氏と共に研究報告をおこなった。ここでは以下に、本研究による具体的な研究成果の一部を記す。

①近代古代論争と近代国家の形成

フランスにおいて最初に近代古代論争を引き起こしたペローは、「近代」すなわち同時代の文芸が古典古代と比較して優れている論拠として、オペラ、滑稽詩、典雅詩といった当時の宮廷文化に培われた「女性的」な文芸ジャンルを挙げていた。ところが近代古代論争では、古代派の中心のボワローが当時のベストセラーであった『崇高論』の序文において、それまで古典古代の言語に固有の価値であった「崇高」が、コルネイユの作品、『オラース』にも見られるとしたことから、優れた古典主義悲劇は古代ギリシア・ローマの文芸に比肩する価値をもつとされるようになった。ところが、ボワローが「崇高」という価値を付与したコルネイユの作品は、何の葛藤もなく息子に国家に命を捧げることを求める主人公オラースを描く『オラース』であったことから、「崇高」は英雄性と深く結びつき、男性主義的な「愛国精神」を色濃く示す形容辞となっていく。その後19世紀にかけて、ヨーロッパ全土で上演されたフランス古典主義悲劇は、欧州共通語としてのフランス語の「言語的規範」となる。

本研究においては、国家機関、アカデミー・フランセーズが遂行する言語政策によって、

フランス語がラテン語に優越する言語とされる過程を問い直すと同時に、18～19世紀のドイツやイギリスにおいても、古代表象がナショナリズムの高揚に用いられる過程を明らかにした。

②近代の「核家族」制度の形成における「古典古代」

1563年のトリエント公会議以前のヨーロッパにおいて、婚姻はキリスト教の秘儀とされつつも、ローマ法にもとづく慣習法による契約であった。近代国家の生成において「父権性家族」の確立が重要な役割を果たしてきたことは言を俟たないが、モンテスキューヤルソーが「近代西欧」にふさわしいと言及し、18世紀半ばに徐々に実現した核家族制度、すなわち「性別役割分担」を前提とした単婚小家族の制度は、基本的にプラトンやアリストテレスなど、古代ギリシアの哲学に立脚したものである。この核家族はアリエスが『子どもの誕生』において言及するように、産業革命以前から民衆においても一般化しており、ナポレオン法典において「男女の自由な性愛の結びつき」によって「国家のために良き個人を育てる場」として法的に定義された。また、19世紀にはモーガンの『古代社会』において、古代固有の野蛮な家族制度として母権制社会が描かれたことから、父権的家族は、近代ヨーロッパが到達した文明的社会の基軸となる構成要素と捉えられるようになる。本研究においては、上記の点を中心に、近代家族の生成において「古代表象」が18～19世紀に果たした役割について考察した。

③「近代」の成立と自然科学：「鏡」としての古代表象

古代ギリシアにおいて発展した自然学や天文学の蓄積が、近代における科学的知見の刷新において果たした役割については、これまでも科学史の分野において注目されてきた。また、近代古代論争に関しても科学史の分野では「古代の幾何学と近代の数学のどちらがすぐれているか」といった議論が知られている。しかし人文学とは異なり、自然科学の歴史においては、「主体」としての女性が排除されてきたこと、各国におけるアカデミーによる活動が国家アイデンティティの顕揚に結びついていたことは、分担者の隠岐さや香氏らの研究により、近年注目されつつあるものの、未だその重要性は知られていない。《近代》の成立に如何なる影響を果たしたのかというジェンダー的側面は等閑視されてきた。本研究においては、近代科学史とジェンダー論を専門とする隠岐が、自然科学に関する研究が男性的な価値を付与される形で発展してきた経緯について検討する。また、この点については、19世紀における写真の発明が近代小説にもたらした本質的変容について、科学技術の発展が文学における「近代」の生成に果たした寄与に関して考察した。

④近代社会の自己了解としての歴史ビジョンの諸相

17世紀終盤以来の近代と古代の優劣を比較する論争における「古代」は、古代ギリシア、もしくはローマ帝国のもつ「帝国」の繁栄のイメージであった。しかし西欧近代にあって、まさに「いま」としての近代を捉える時代意識の枠組みとしては、古代と近代の比較がこのような形でなされたばかりではない。近代の時代意識のなかに併存している多様な歴史ビジョンは、文化潮流の交錯を示すだけでなく、近代国家のアイデンティティ形成の根幹をなしている。本研究においては、この近代社会の自己了解としての歴史ビジョンについて、フランスを対象とした研究にとどまらず、ドイツとイギリスの事例を検討することによって、ヨーロッパ全体における「古代表象」の利用の差異に関して明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計18件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 15件）

1. 著者名 島山達	4. 巻 55
2. 論文標題 ボードレールにみる模倣と反逆の詩学	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 仏語仏文学研究	6. 最初と最後の頁 163-183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/0002003838	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 三枝大修	4. 巻 234
2. 論文標題 言葉の狩り場 ジュール・ヴェルヌ「狩りの10時間」と『フィガロ』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 成城大學経済研究	6. 最初と最後の頁 191-216
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 井関麻帆	4. 巻 53-4
2. 論文標題 18世紀フランスにおける父権の表象 ジャック＝ルイ・メネトラの『わが人生の記』を通して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 福岡大学人文論叢	6. 最初と最後の頁 1247-1268
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 井関麻帆	4. 巻 21-3
2. 論文標題 ルソーとモリエール 父権の表象をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 福岡大学研究部論集A：人文科学編	6. 最初と最後の頁 9-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 玉田 敦子	4. 巻 44
2. 論文標題 批判と礼賛：プラトンにおけるレトリックの地位	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中部大学 人文学部研究論集	6. 最初と最後の頁 83-99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 玉田 敦子	4. 巻 45
2. 論文標題 リベラルアーツ概念の歴史的変遷：レトリックによる「判断力」の養成をめぐる	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中部大学 人文学部研究論集	6. 最初と最後の頁 45-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小倉孝誠、玉田敦子、真野倫平	4. 巻 27
2. 論文標題 文学と歴史 (学) の関係を問い直す	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 cahier (日本フランス語フランス文学会)	6. 最初と最後の頁 13-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Toru Hatakeyama	4. 巻 120e annee, no. 3
2. 論文標題 Baudelaire et les Lecons francaises de litterature et de morale et Delaplace	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Revue d' Histoire litteraire de la France	6. 最初と最後の頁 573-584
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Toru Hatakeyama	4. 巻 23
2. 論文標題 Baudelaire et l'hendiadys	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 L'annee Baudelaire	6. 最初と最後の頁 37-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井関 麻帆	4. 巻 第52巻第2号
2. 論文標題 レチフ・ド・ラ・ブルトンヌの父親像 『ムッシュー・ニコラ』における幼少年期をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福岡大学人文論叢	6. 最初と最後の頁 601-625
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井関 麻帆	4. 巻 第52巻第3号
2. 論文標題 ジュネーブにおけるルソー家の来歴 父親からの継承をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福岡大学人文論叢	6. 最初と最後の頁 889-912
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yoshiho IIDA	4. 巻 n 52
2. 論文標題 'Cercle vicieux' dans l'article Droit naturel de Diderot	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Dix-huitieme siecle	6. 最初と最後の頁 321-336
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3917/dhs.052.0321	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 畠山 達	4. 巻 52
2. 論文標題 Ut pictura poesisとボードレールの試み : 「古典」との対比を通じて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 仏語仏文学研究 = Revue de langue et litterature francaises	6. 最初と最後の頁 105 ~ 130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15083/00079084	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井関麻帆	4. 巻 第51巻第4号
2. 論文標題 ルソーにおける家族像 : 『新エロイズ』にみる理想の家族の崩壊をめぐる	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福岡大学人文論叢	6. 最初と最後の頁 1021-1046
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 隠岐さや香	4. 巻 第78巻、第3号
2. 論文標題 新居洋子著 『イエズス会士と普遍の帝国 : 在華宣教師による文明の翻訳』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋史研究	6. 最初と最後の頁 159 - 170
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安藤隆穂	4. 巻 第50号
2. 論文標題 公教育と道徳 : フランス革命期公教育論争の経験から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 法の科学	6. 最初と最後の頁 107-111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井関麻帆	4. 巻 第54巻
2. 論文標題 善良なる暴君：『新エロイーズ』におけるルソーの父親像	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 フランス文学論集	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 玉田敦子	4. 巻 42
2. 論文標題 ロンギノス『崇高論』再読：初期ストア派の思想をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中部大学人文学部研究論集	6. 最初と最後の頁 29-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 3件／うち国際学会 3件）

1. 発表者名 玉田敦子
2. 発表標題 近代語による国家の創設 アカデミー・フランセーズと啓蒙期の言語革命
3. 学会等名 日本18世紀学会第43回大会共通論題：学問・芸術の制度と『自由』 18世紀におけるアカデミー、大学、官僚機構（コーディネーター： 隠岐さや香）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石橋正孝、新島進、福田桃子、三ツ堀広一郎、三枝大修
2. 発表標題 『レペルトワール』を読む
3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会2021年度春季大会ワークショップ
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 玉田 敦子
2. 発表標題 アンシャンレジーム期における文学と歴史(学)の接点
3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会 ワークショップ「文学と歴史(学)の関係を問い直す」: コーディネーター・パネリスト: 小倉 孝誠 (慶應義塾大学)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 玉田 敦子
2. 発表標題 近代国家の形成におけるアカデミー・フランセーズの役割
3. 学会等名 科研費基盤研究C「フランス・アカデミーの総合的研究」研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 IIDA, Yoshiho
2. 発表標題 La politique du solitaire : la notion d' 'homme de bien' chez Rousseau, 1757-1760
3. 学会等名 Les Lumieres dans leurs contextes (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 IIDA, Yoshiho
2. 発表標題 Re-formation de la pensee morale chez Rousseau en 1757
3. 学会等名 日仏若手啓蒙思想研究共同セミナー
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 玉田敦子
2. 発表標題 近代国家の形成におけるフランス語の役割：『アカデミー・フランセーズの辞書』を中心に
3. 学会等名 関西英語辞書研究会 (KELC) (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 玉田敦子
2. 発表標題 18世紀フランスにおける「男らしさ」の起源：修辞学におけるストア主義的伝統をめぐって
3. 学会等名 「内乱／革命とジェンダー」研究会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 玉田敦子
2. 発表標題 リベラルアーツの歴史的変遷
3. 学会等名 中部大学シンポジウム「21世紀のリベラルアーツ」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 SAKAMOTO, Takashi
2. 発表標題 The Tale of the Bamboo Cutter and the Orphic-Pythagorean (In Session355: Asian Identities in the Global Enlightenment 3)
3. 学会等名 15th International Congress for Eighteenth-Century Studies (国際18世紀学会) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 IIDA, Yoshiho
2. 発表標題 Encoder la genese d'un texte : Reconstruction d'un manuscrit de Rousseau par encodage textuel
3. 学会等名 15th International Congress for Eighteenth-Century Studies (国際18世紀学会) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 TAMADA, Atsuko
2. 発表標題 Enargeia et Energeia : L'heritage de la pensee greco-romaine et le statut des femmes a l'age des Lumieres (In Session 274: Le statut et l' identite des femmes dans la philosophie des Lumieres)
3. 学会等名 15th International Congress for Eighteenth-Century Studies (国際18世紀学会) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 坂本貴志
2. 発表標題 共通論題 II 「《近代》の形成における古代表象の諸相」一時空間における多数性への転回：カントの「普遍自然史」について
3. 学会等名 日本18世紀学会第41回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 玉田敦子
2. 発表標題 共通論題 II 「《近代》の形成における古代表象の諸相」基調講演
3. 学会等名 日本18世紀学会第41回全国大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計12件

1. 著者名 深貝保則、安藤隆穂、玉田敦子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 中部高等学術研究所（中部大学ドキュメントセンター）	5. 総ページ数 33
3. 書名 人新世のあなたより 技術の射程、人間性のゆくえ：第7回「人文学の再構築」研究会報告書, Studies Forum Series 111号	
1. 著者名 大貫敦子、安藤隆穂、玉田敦子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 中部高等学術研究所（中部大学ドキュメントセンター）	5. 総ページ数 33
3. 書名 社会改革思想と優生学思想の親和性 19世紀末からナチス時代へ：第9回「人文学の再構築」研究会報告書, Studies Forum Series 111号	
1. 著者名 隠岐さや香	4. 発行年 2021年
2. 出版社 晶文社	5. 総ページ数 264
3. 書名 専門家とは誰か：（村上陽一郎編）[担当：隠岐さや香「科学と『専門家』をめぐる諸概念の歴史」]	
1. 著者名 隠岐さや香他、日本18世紀学会『啓蒙思想の事典』編集委員会	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 714
3. 書名 啓蒙思想の百科事典 [担当：隠岐さや香「4-2 進歩史観と啓蒙」]	

1. 著者名 永井敦子、畠山達、黒岩卓（編著）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 246
3. 書名 フランス文学の楽しみかたーウェルギリウスからル・クレジオまで	

1. 著者名 初田哲男、大隅良典、隠岐さや香	4. 発行年 2021年
2. 出版社 柏書房	5. 総ページ数 216
3. 書名 「役に立たない」研究の未来	

1. 著者名 新島進（編）、私市保彦、フォルカー・デース、三枝大修、荒原邦博、識名章喜、石橋正孝、巽孝之、島村山寝、藤元直樹	4. 発行年 2021年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 308
3. 書名 ジュール・ヴェルヌとフィクションの冒険者たち	

1. 著者名 飯田賢穂（永見文雄・小野潮・鳴子博子編著）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中央大学出版部	5. 総ページ数 392
3. 書名 「『道徳書簡』『第三書簡』の二源泉」ルソー論集：ルソーを知る、ルソーから知る	

1. 著者名 HATAKEYAMA, Toru	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Classiques Garnier	5. 総ページ数 535
3. 書名 La Formation scolaire de Baudelaire	

1. 著者名 上垣豊、玉田敦子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 346
3. 書名 はじめて学ぶフランスの歴史と文化	

1. 著者名 石井洋二郎、安藤隆穂、玉田敦子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 中部高等学術研究所（中部大学ドキュメントセンター）	5. 総ページ数 31
3. 書名 人文学の再構築に向けて：第6回「人文学の再構築」研究会報告書, Studies Forum Series 111号	

1. 著者名 松嶋明男、竹中幸史、安藤隆穂、玉田敦子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 中部高等学術研究所（中部大学ドキュメントセンター）	5. 総ページ数 49
3. 書名 『礼拝』の自由が切り開いた学問の新たな地平 / フランス革命期の教育と祭典：第5回「人文学の再構築」研究会報告書, Studies Forum Series 110号	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	安藤 隆穂 (ANDO Takaho) (00126830)	中部大学・中部高等学術研究所・特任教授 (33910)	
研究分担者	深貝 保則 (FUKAGAI Yasunori) (00165242)	横浜国立大学・大学院国際社会科学研究院・名誉教授 (12701)	
研究分担者	坂本 貴志 (SAKAMOTO Takashi) (10314783)	立教大学・文学部・教授 (32686)	
研究分担者	畠山 達 (HATAKEYAMA Toru) (10600752)	明治学院大学・文学部・教授 (32683)	
研究分担者	隠岐 さや香 (OKI Sayaka) (60536879)	東京大学・大学院教育学研究科(教育学部)・教授 (12601)	
研究分担者	井関 麻帆 (ISEKI Maho) (70800986)	福岡大学・人文学部・准教授 (37111)	
研究分担者	三枝 大修 (SAIGUSA Hironobu) (80707662)	成城大学・経済学部・准教授 (32630)	
研究分担者	飯田 賢穂 (IIDA Yoshiho) (90806663)	慶應義塾大学・商学部(日吉)・研究員 (32612)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	石井 洋二郎 (Ishii Yojiro) (90134402)	中部大学・人文学部・教授 (33910)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Le Dix-huitieme siecle et Lumieres : l'Etat des etudes et des questionnements	開催年 2019年～2019年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
フランス	パリ大学ソルボンヌ校	リール大学	パリ第8大学	
スイス	ジュネーヴ大学			
英国	オクスフォード大学			
中国	中国人民大学			
韓国	ソウル大学			